

細井平洲先生の『嚶鳴館遺草』巻第六

花木の花 本

○はな木の花の十分につきたるは見事なる至極也。みごと しごくなり

されども花を十分につけおけば、次第に身木もひねしんぼく

て実もすくなくなりて枯枝多く出来て身木のいたみみ かれえだ

となれば、見事なりし名木も見所なくなるめいぼく みどころこと故に、ゆえ

をしけれども枝をとめ、つぼみをすかして、いつま

でも見事なる花をめでんとはすることなり也。

花木の花 本 はなき はな もと

○花の咲く木に、花が咲き誇るのは、とてもみごとです。

でも、花をそのまま咲かせておけば、しだいに幹もよじれてまがり、実も少なくなり、枯れ枝が多くなり、幹がいたんでくる。だから、どんないい木であっても、見るべきところがなくなってしまうので、おいしいことだけでも枝を切り落とし、つぼみを少なくして、いつまでも同じようにみごとな花をめようとするのです。

美服美食美宅は太平の世の有さまにて、誠に目  
出度けれども、十分に奢らすれば、次第に財用困窮  
して、やがて飢餓する者も多くなり、家国の衰微と  
なりて目出度かりし家国に奸民多くなり、付ては  
刑戮もしげく、外聞実義ともに取失ふこと故に、  
明君賢相は是を憂へて制をたて、禁をまうけて奢  
をとどめ質素にたてかへして、いつまでも目出度家  
国をたもたんとはし給ふことなり。

美しく着飾り、おいしいものばかりを食べ、いい家に住んで  
いるのは、平和な時代のありさまで、じつにめでたいこと  
ではあるが、ぜいたくばかりをすれば、しだいにお金がなく  
なって生活に困るようになり、やがて食べることができなく  
て飢える者が多くなってきて、国家の勢いが衰えて弱くなっ  
てきて、道理にはずれた悪い人が多くなってきて、刑罰に処  
することも多くなってきて、世間の評判も道理も失ってしま  
うので、賢明な君主や賢明な家臣は、そのことを心配して、  
おきてを定め、禁止令をだして、ぜいたくをしないようにさ  
せ、質素な生活をするようにさせて、いつまでもすばらしい  
国家を保たせようとしておられるのである。

花木の花をいつまでも見事にみんとて、枝をとめ

つぼみ  
荅をすかせば、一春二春は見ごとなる賞翫しょうがんもなら

ず。され共一年二年の賞翫しょうがんをこらへて、行末久しゆくすえひさ

き春をたのしむは、実に花木をすける人なり。

めでたき家国かこくを幾久敷いくひさしくとりつづかせんとて、五年

十年の節儉せつけんを守り、苦勞まづりごとなる政まつりごとをつとめて、行末ゆくすえ

の安富あんぷを計り給ふは、実に家国だいじを大事たもに保ち給ふ

仁君じんくんなり。

木に咲く花をいつまでも、みごとなものを見ようとして、

枝を切り、つぼみを少なくしてしまえば、一年目、二年目の

春にはみごとな花を見ることはできない。

だけれども、一年、二年のあいだは、春の花見はできない

が、それによって、いつまでも末永く花の咲く春を楽しませ

てくれるのは、本当に花の咲く木を助ける人である。

喜ばしい国家を、いつまでも続かせようと、五年十年の節

約をして、苦勞の多い政治をして、将来の安楽と豊かさをは

かっていかれるのが、本当に国家を大事にされる慈しみ深い

君主なのです。

花木のはなのさかりなるは、去年今年の実生みしようにあ  
らず。実植じつしょくよりとしをかきね春をつみて、花は盛さかんに  
実みもみのれる也。しかれば此このはなを永くみんとて、  
枯枝をきり虫つきたる葉をつみ、延過のびすぎたる末枝をと  
め、荅過つぼみすぎたる花をすかし、日除霜除ひよけしもよけをして根ねに土か  
ひ、朝あさな夕ゆうなに心をつけて、身木しんぼくのいたまぬやうに  
して、肥過こえすぎて花のあせぬやうに実のよくとまるやう  
にと、如才じよさいなく世話せわをすること也。  
もし心得違こころえたがへて一旦いったんに枝をもぎとり、荅つぼみをむし  
りとりて、土かぶ手当てあてはなく切きりつめることとのみ心こころ  
得えれば、忽たちまちに枯木かれきとなり多年しうがんの賞翫しょうがんもむなしくな  
ること也。なり

花がみごとに咲く木は、去年とか今年になって芽を出して  
きたものではありません。植えてから何年もたって、何回も  
春をむかえて、りっぱな花が咲くようになり、実をつけるよ  
うになったものです。

ですから、この花を長いあいだ鑑賞できるやうにと、枯れ  
枝を切りとり、虫のついた葉をつみ捨て、のびすぎた枝をと  
とのえ、つぼみを少なくして、日除け霜除けをして、根に土  
をかぶせ、朝も夜も心を寄せて、幹の痛まないやうに、実が  
よく成るやうにと、手抜かりのないやうに世話をすること  
です。もし、まちがって、一度に枝を切りすぎてしまい、つぼ  
みを取りすぎてしまい、土をかぶせず、ただ、切りつめるこ  
とだけをすればいいと思うのならば、すぐに、枯れてしまい、  
長いあいだ花見をしてきたかいもなくなってしまう。

めでた めた はんじよう 十年 にじゆうねん 廿年の功業 こうぎよう には

あらず、祖先 そせん 開国 かいこく の君 きみ、戦争 せんそう の心 こころ をしづめ たま 給ひて、

順 じゆん 従 じゆう の気 き に移 うつ さんとては、弓 ゆみ は袋 ふくろ にをさ かた ぬは

鞘 さや にをさ さ めてよろ ふ づしとや し かなる風 ふう を賞 しょう し給 たま ひし

より、数十 すうじ 百年 ひゃくねん を経 へ て、ひと ひと びと ひと あらく あ れたる風 ふう 義 ぎ を

や や め、お お と と な な し し き き す す が が た た と と は は な な り り た た る る 也 なり。

され され 共 とも 強 きやう 気 き は質 しつ 朴 ぼく にて、柔 にゅう 和 わ は奢 しや 美 び に流 なが るるは

自然 じぜん の勢 いき な な れ れ ば、今 いま 太 たい 平 へい の人 ひと 民 みん 富 ふ 饒 じよう の世 せい に生 せい 長 ちやう

して、質 しつ 素 そ なる なる つと つ め め は は 何 なに と と な な く く 難 なん 儀 ぎ なる なる や や う う に に 思 し

ふ ふ こ こ と と は は 道 どう 理 り なる なる こ こ と と 也 なり。

り り つ つ ぱ ぱ な な 国 こく 家 か の の 繁 はん 栄 えい は、十 じゅう 年 ねん、二 に 十 じゅう 年 ねん の の 功 こう 績 じき に に よ よ る る も も の の で

は は あ あ り り ま ま せ せ ん。祖 そ 先 せん の の 国 こく を を 開 ひら いた た 君 きみ 主 ぬし が、戦 いくさ を を や や め め て、す

な な お お に に 従 したが う の 気 き 持 もち ち ち に に さ さ せ せ よ よ う う と、弓 ゆみ を を 袋 ふくろ に に しま ま い、刀 やいば を を 鞘 さや に

お お さ さ め め て、す す べ べ て て の の こ こ と と を を し し と と や や か か に に す す る る こ こ と と を を ほ ほ め め た た た た え

る る よ よ う う に に し し て、数 すう 十 じゅう 年 ねん、百 ひゃく 年 ねん が が た た っ っ て、人 ひと 々 々 は は 荒 あ ら ら ぐ ぐ れ れ た た こ こ と

を を し し な な い い よ よ う う に に な な り、お お と と な な し し く く 過 すご ぐ ぐ す す よ よ う う に に な な っ っ た た の の で で す。

し し か か し し な な が が ら、気 き が が 強 きやう い い こ こ と と は、性 せい 格 かく が が す す な な お お で で 律 りつ 義 ぎ に に な

る る が、性 せい 質 しつ や や 態 たい 度 ど が が も も の の や や わ わ ら ら か か で で あ あ る る こ こ と と は、ぜ ぜ い い た た く く に

な な り り や や す す い い こ こ と と は、自 じ 然 ぜん の の う う ご ご き き で で す。現 げん 在 ざい の の 平 へい 和 わ な な 世 せい の の 中 ちゆう

で で 育 そだ っ っ て て き き た た 人 ひと び び と と は、も も の の が が 豊 とよ か か に に み み ち ち あ あ ふ ふ れ れ る る な な か か で で 育

っ っ て て お お り、質 しつ 素 そ な な 暮 く ら ら し し を を す す る る こ こ と と が が お お つ つ か か し し い い と と 思 し う う こ こ と

も、も、も の の と と お お り り で で す。

しかれども此富饒を久しくつづかせんとて、不孝ふこう不弟ふていにて父母の養やしなひを忘れ、家業をすてて悪行あくぎやうをこととするものを取除とりのぞき、其終そのまに捨すておけば不屈ふくつもの者にもなり、はづべきものをいましめ、似合にあわざる無益むえきの芸能を好みて、今日きようをむだに過すごす者をおさへ、美服びふく美食しょくびたくをこととして、己おのが富饒ふじやうなるを人におごり示しめす者を嚴禁げんきんして、其上そのうえに孝弟礼讓こうていらいじやうの道を教さとへ諭さとして、よき者は一人もふえ、悪きものは一人も減るやうに心もちを用もちひて、衣服いふくの用困窮ようこんきゆうに至いたらぬやうに、まめやかに世話せわをし給たまふこと也なり。

しかしながら、この富んで豊かな時代を、長く続かせようとするならば、親不孝で、兄や年長者に従わずに、親のめんどうを見ず、家業を捨て、悪いことをする者をとりのぞき、ほかしておくと同服従しないようなはずかしい者を、教えさとして、似合わない無駄な芸能を好きになって、一日を無駄に過すような者をやめさせ、美しく着飾り、おいしいものばかりを食べ、いい家に住むことを、見せびらかすような者を、きびしくやめさせる。そのうえに、父母に孝行で、兄や年長者によくしたが、礼儀をつくして謙虚な態度をとる、人として踏み行ふべきみちを教えさとして、ひとりでもよい人が増えるようにし、悪いことをする人がひとりでも少なくなるようにと気をつけて、衣服に困らないように、まめに世話をやくことです。

もし心得違こころえたがて善ぜんを挙あげて不能ふのうを教おしふる化道けどうのつとめをわすれ、俄にわかに省減しょうげんの法ほうをのみやかましくたつれば、人心じんしんいとひうらみて、国風荒衰こくふうこうすいし恩政おんせいのしるし見えぬうちに、先怨憤ますおんぶんの情じょうを引出ひきだし、上もこり下もこりて、はてはてはゆきなり次第しだいになりゆくものなり也。

病やまいをうけて後俄のちにわかに薬くすりを用もちひ灸きゅうをすうるは、手おくれなること也。しかし手をつかねて死まつを待まちよりはましといふまでにて、養生ようじょうの本意ほんいにあらず、

もしも心得ちがいをして、善いことをすすめ、できないことを教えみちびく務めをわすれてしまつて、急に儉約のことで、やかましく言い立てれば、人の心は、いやがつてうらむようになる。すると、国の風俗は荒れ衰えて、善い政治が行なわれていることが明らかにならないうちに、まず、いかりいきどおる気持ちを引き出してしまい、上に立つ者も痛手を受け、下の者も痛手を受けて、しまいには、なすがままの状態になつていつてしまふものです。

病氣になつてから、急に薬を飲み、灸きゅうをすえて治療して、いは手遅れです。でも、そのまま死ぬよりは、ましといふだけのことで、生活に留意して健康の増進を図ること（養生）の本来の目的ではありません。

実じつの養生ようじょうといふは、先まず不断ふだんの心懸こころがけにて、口くちにう

まけれ共膏味どもこうみを過すこさず、身みは楽どもあんいつなれ共安逸どもあんいつをほしい

ままにせず、よきほどに食たべ、よきほどに運動うんどうして、気き

血けつを廻めぐらし臟腑ぞうふをすかし、病やまいの出ぬやうにと申もうす

処ところ養生ようじょうの專要せんようなり。

乱世らんせいの民たみは食しょく乏とほしく瘦衰やせおとろへてうごきえぬ人の

如ごとし。

其その瘦やせて力ちからなきはうちに入いるる食物たべものの乏とほしきゆゑな

れば、粥雜炊かゆぞうすいの類たぐいにてもそろそろたべさせやしなて養やしなひ

たつれば、次第しだいに肌肉はだにくもつき、色いろ艶つやも直なおり、手足てあしの

力ちからも出来できて、丈夫じょうぶになりやすし。

本当の養生というのは、まずふだんのこころがけが大事で

あって、うまいからといって食べすぎず、からだが楽だから

といって、何もせずに、ぶらぶらと遊び暮らすことをしない

で、適当に食べ、適当に運動して、生氣と血液をめぐらして、

腹をすかして、病氣にならないようにするのが、養生の最も

大切なことです。

乱れた時代の民衆は、食べるものがなくて、やせ衰えて動

けなくなってしまうた人のようです。やせてしまって力がな

くなってしまったのは、たべるものがないことからですので、

おかゆやぞうすいのようなものであっても、徐々にたべさせ

て養生させれば、しだいに肉もつき、色つやもでてきて、手

足あしの力ちからもでてきて、じょうぶにすることができます。

ちせい たみ たべもの  
治世の民は食物すぎて、肥ふとりたる人の得動か  
ぎるが如し。其ふとりこえて気おもく手足たるきは、  
びしよく すぎ ゆえ  
美食の過たる故なり。

こえ  
さればとて幼年より美食美味をたべ習うて、数十  
年に肥ふとりたる人を、俄に瀉下の薬を用ふれば、  
そん  
元気を損じて死に至る。さればとて外よりそぎへら  
すべ  
すべき術もなし。うちへいるる食の多きとて断食を  
さすれば忽ち死す。せんかたもなき病気也。

まずそのりがい  
この病人には先其利害をよくのみこませて、三碗  
めし わん へら  
の飯を二碗に減し、二汁五菜を一汁三菜に減し、

太平の時代の民衆は、食べすぎて太ってしまったって動けなくなつてしまった人のようです。太りすぎて気力もなく、手足も重いというのは、うまいものを食べすぎたからです。

だからといって、小さいときからうまいものを食べて、何十年も太ってきた人に、急に下剤を使ってやせさせようとしても、元気をなくさせて、死なせてしまいます。といって、ほかにやせさせる方法ありません。食事の量が多いからといって、断食させれば、すぐに死んでしまいます。どうしようもない病気です。

この病人には、まずどちらが得で、どちらが損かを、よく理解させて、三杯の飯を二杯に減らし、二つの汁物と、五品のおかずを、ひとつの汁物と、三品のおかず減らして、

うまく仕立したてる塩梅あんばいをいつとなくかるく仕立したて、日々  
月々に用ひ習ひて、かるきものは腹心はらごころよく、小食しょうしょく  
は気分きぶんのかるくなる道を自身おほと覚おぼて運動すれば、身  
も健すこやかになるを覚さとるやうに教ほかるより外ほかはなし。是これを  
教化きょうかとはいふなり。

孔子こうし衛国えいこくにに入給いりたまひて、富とまさん教おしえんとたまの給たまひしは  
乱世らんせいの勢也いきおいなり。食物しょくもつ拵ふ底ていにて腹はら一杯いっぱいも得えたべやせず瘦  
つかれて居いる人ひとには、まづまづ粥かゆにても雑炊ぞうすいにても  
快こころよくたべさせはたらてからの養生也ようじょうなり。今いま餓死がしもすべき  
人に動うごき働はたらきをすすむべきやうはなし。

塩加減をうすくして、毎日毎日そのようにして、月日をかさ  
ねて、腹八分目であれば、気分も軽いということを、自分自  
身が身をもつて覚えて、運動もするようになれば健康である  
ことを、さとるように教えるしかありません。これを、教化  
(人を教え導き、望ましい方向に進ませること)というので  
す。

孔子が衛の国に行かれたとき、「豊かにしてのち、教育す  
る」とおっしゃられたのは、乱れた時代の対応のことです。  
食べものがなくて、腹いっぱい食べることができずに、やせ  
疲れてしまった人には、まづかゆでもぞうすいでも、こころ  
よく食べさせることです。いまにも死にそうな人に、動きな  
さいとか、働きなさいということはできません。

されば富せて後に教んとはの給ひし也。只今太平  
二百年富栄えて衣食住にことかかぬ目出度御代の民  
は、たべふとりて気重になりたる病人なれば、此病  
人を療治する法は上に申如く、自分と養生に心ざ  
すやうにするより外はなし。  
されば教へて後に富すべき時節なり。金銀米穀に  
はことかかぬ世中なれ共、奢侈の風さかんにて無益  
の費かぎりなく、人々貧になりたるなれば、昔の民  
はなくて貧になりたる也。

ですから、孔子は、「豊かにしてのち、教育する」とおっし  
やられたのです。いま、太平の時代が二百年も続き、豊かに  
なつて衣食住に不自由することのない民衆は、食べすぎて、  
気分の晴れない病人ですので、この病人を治療する方法は、  
前述したように、みずからが養生をこころがけるようにする  
しかありません。  
ですからいまは、教育して富ます時代なのです。お金や食  
べものが不足して不自由な思いをする世の中ではないのに、  
かえって度を過ぎたぜいたくな風潮で、そのため無益な支出  
をして、人々が貧しくなったのです。おかしの人々は、お金  
や食べものがなくて貧しかったのです。

いま 余りありあま 貧になりたる也。されば自身と

養生を心懸さへすれば、外より食物を求るに及ば

ず、食物を減じて丈夫もつくことにて、節儉を尊ぶ

心になれば、財用は自然と融通すること也。

是をしへて後に富する道也。聖人の詞を取直して

今日の用に立ることは、恐多きことのやうなれども、

是則時と勢とをしる道にて、実に聖学の極意也。

いまの人びとは、ありあまって、貧しくなったのです。で

すから、みずからがところがけさえすれば、ほかから食へも

のを求めなくてもいいし、節食をすれば元気になります。節

約、節約をする気持ちにさえなれば、生活費も自然とやりく

りできます。

これが、「教育して富ます」道理です。聖人〔孔子〕の教え

を、読み替えていまの役に立てようとするのは、恐れ多いこ

とではありますが、これが、時代とその状態を知って対応す

る方策であり、聖人の教えの本質なのです。

貧病ひんびょうは治なほし安やすく、富病ふびょうは治なほし難かたし。乱世らんせいの民たみは養やしなひやすく、治世ちせいの民たみは養やしなひがたし。扱さて又また養生じょうじょうにしおきの養生じょうじょうといふことはなし。

たとへば昨日きのう灸きゆうをすゑおきたる故ゆえに、今日きょう不養ふじょう生じょうをしてもよく、今日きょう薬やくを飲のみおくは明日あす大食たいしょくすべ

き為ためといふやうなるは、よに愚おろかなること也なり。今日きょうも

明日あしたも飲のみも食たべるも氣きをつけて身みの働はたらきも慎つつしみ、けふ

も慎つつしみあすも慎つつしみて、九十歳さい百歳ひゃくさいの寿命じゅみょうを保たもつ、

是これ養生じょうじょうの極意ごくいなり。

まずしさの病氣は治療しやすいが、ゆたかさの病氣は治療しにくいのです。乱れた世の中の民衆は、世話をしやすいのですが、太平の世の中の民衆は、世話がしにくいものです。生活に留意して健康にくらすことに、作りおかれた方法といふのはありません。

たとえば、きのう治療のための灸をすえておいたから、今日は健康に気をつけなくてもよい、きょう薬を飲んでおくのは、あす大食いするためである、といったようなことは、とてもおろかなことです。きょうもあすも、飲みもの、食べものに気をつけて、からだをつつしんで、きょうもつつしみ、あすもつつしむことによって、九十歳百歳までも寿命を保つことが、生活に留意して健康にくらすことの最も大切なことです。

家国の政まつりごとも又然りまたしか。今日よく世話を致し置たいたれば、是これにて五年十年は世話をやくに及ばぬといふおよ道はなし。

政まつりごとの道は元朝げんちようより大晦日迄おおみそかまで、一日一日とつとめて、ぬけめ油断ゆだんのなきやうにまめやかに世話をすること也なり。

故ゆえに賢人君子けんじんくんしは夙夜不懈しゆくやおこたらず一人につかうまつりて始終しじゆうかはらぬを忠ちゆうといふ。

世話する人がなくなれば又またよき世話人を代りに立かわて、とかく善政たえの絶ぬやうにと心を尽し給つくふは仁君じんくんの道也みちなり。

国家の政治も同じです。きょうよく世話をしておいたから、あと五年十年は世話をしなくてもいいということはありませ

ん。  
政治の道は、元旦から大晦日まで、一日一日を務めて、手抜かりがないように、油断のないように、注意を行き届かせて世話をすることです。

ですから、賢い人や教養のある人というのは、朝早くから夜遅くまで、気をゆるめずに、ひとりの人に仕えて、いつもかわらないことを「忠（まごころをつくす）」というのです。  
政治をつかさどる人がいなくなったなら、またよい人かわりに立てて、とにかく善い政治が続くやうにと、心を尽すのが、慈しみ深い君主のなすべきことです。

家国の興衰は常といふことはなく、上の世話よく

とどけば栄え、世話不沙汰なれば衰ふ。

禹湯文武の聖王にても、子孫愚にして怠たれば、

ありがたかりし政もすたれはてし事、歴然たるこ

と也。

乱世久しく続きやうやく治りたるはじめは、世

界一統に財用不足して、貧につまりては飢餓に至る

ものも多きなり。太平久しき御代は世界一統に財用

も満足して、富饒に余りて奢侈長過し、夫故に

飢餓に至る者多し。されば乱世の民は貧にせまりて

苦み、太平の民は富に余りて苦む。

国家が興る、衰えるということは、常にあることではなく、

為政者の世話が行き届いておれば栄え、世話が行き届かなければ衰えるのです。

古代中国の明君である、夏の禹王、殷の湯王、周の文王・

武王の徳が高く、立派な政治をする君主でも、その子孫がおろかでおこたるようであれば、立派な政治もすたれはててしまふことは、明らかなことです。

乱れた世の中が長いあいだ続いて、ようやくおさまったときには、社会全体にもとでがなくて、貧しさのために飢える者も多くなる。太平の世が長くつづいた現在は、社会全体が豊かになり、有り余ってぜいたくを続け、その結果、飢える者が多くなった。だから、乱れた世の中の民衆は、貧しさゆえに苦しみ、太平の世の民衆は、豊かさゆえに苦しんでいる。

貧ひんより貧ひんになりたる民は救ひ恵み安し。富ふより貧ひんに成たる民は救ひ恵みがたし。

たとへば蔬食そしょくとほ乏くひしく食くひつけたる人の腹のへりたるは、湯漬食ゆづけしよくに塩菜しおなにても佳肴珍美かこうちんびにおなじくうまけれども、美食びしょくたくさん沢山たくさんに食くひつけたる人の腹のへりたるは、一汁二菜じゅうにさいの料理にては、さのみ食たべたるやうにも思はぬは、人情つねなりの常也。

故ゆえに古語こごにも凍こごえたるものは衣いをなしやすく、飢うえたるものは食しよくをなしやすしなどいへる也なり。乱世らんせいに貧ひん窮きゆうを救ふ道にては治世ちせいの富饑ふがはすくひ難がたし。

貧しさゆえに貧しくなった民衆は、救いめぐみやすいのですが、豊かさゆえに貧しくなった民衆は、救いめぐむことがおつかしいものです。

たとえば、野菜をちよつとしか食べることができずに空腹になった人には、湯漬に塩菜だけの食事でも、おいしい料理ですが、おいしいものをたくさん食べてきた人の空腹には、一汁二菜の料理では、それほど食べたように思わないのは、人の気持ちとしてはあたりまえのことです。

ですから、古いことばにも、「凍えた人には、何を着せても喜ばれるし、飢えた人には、何を食べさせても喜ばれる」などと言うではありませんか。乱れた世の中で貧しくて生活に苦しんでいる人を救う手だてで、太平の豊かな世の中で、豊かさゆえに貧しくなっている人を救うことはできません。

乱世の民は食しょくにうえて瘦やせ勞れ動きえぬ病人びやうじんなり。

治世の民は大食してふとり過ぎ立居たちいのならぬ病人びやうじん也。

病やみて得動えうごかぬ処ところは同症どうしようと見ゆれども、病因びやういんは

雲泥うんでいの違ひなり。

奢侈しゃしになりたる民は病人びやうじん也。支配しやくする役人は医者

なり。病やまいには内傷外感其病なにしやうがいかんそのやまいさまさま也。是これを療

治する医者いしやくは望聞ぼうぶん問切もんせつさまさまの功者こうしやあることな

り。

まづ望ぼうといふは病人びやうじんの顔色容貌かおいろようぼうに心をつけてとく

と見察けんさつすること也。聞なりといふは病人びやうじんのものごし音声

に心をつけて得とくと聞察ぶんさつすることなり。

乱れた世の中の民衆は、食べるものがなくてやせおとろえ

た病人です。太平の世の中の民衆は、大食いして太りすぎて

動くことのできなくなった病人です。それぞれこのように動

けなくなったことは同じ症状ですが、その病気の原因には、

大きなちががあります。

ぜいたくになった民衆は病人です。政治をつかさどる役人

は医者です。病気には、うちからのもの、そとからのもの、

そのほかいろいろあります。これを治療する医者には、望聞

問切といったさまさまなことに優れた人がおります。

まず、望というのは、病人の顔色やようすに気をつけて、

よく観察することです。聞というのは、病人の身のこなしや

声に気をつけて、よく聞いて観察することです。

問といふは病やまいのおこり次第しだいを得と問とくひしることなり。切せつといふは脈みやくをとり腹はらをおしてしつかりと心みきりに見切みきりを定さだむること也。

この望聞問切ぼうぶんもんせつは何れいずの医者もすることなれども、病人しんせつに深切しんせつなる医者い者は、げにげに病人しんせつの苦痛くつうを我身わがみの苦痛くつうの如ごとく、真実心しんじつより平癒へいゆいたさせたく思おもふ処ところより、匙加減さじかげんもとりつ置おきつ思案工夫しあんくふうをこらして、一日に一度見まはる所へ二度も三度も立廻りたちまわ、薬くすりの加減かげんに油断ゆだんをせぬは、是上手これじょうずにてたのもしき医者なり也。

問というのは、どうして病氣になったのかを、よく問いただすことです。切というのは、脈をとり、おなかをおさえて、しっかりと診断して、病氣の内容を決めることです。

こうした望聞問切は、どんな医者もすることですが、病人に親切な医者い者は、ほんとうに病人の苦痛を、自分のことのように思い、心から治してやりたいと思うから、薬のさじ加減もいろいろと考え、一日一回見回るとところを、二回も三回も見回って、薬の効き具合に油断をしない。こうした医者い者は、じょうずな頼もしい医者い者です。

やくめひととお みやく  
役目一通りに脈を見、思ひ付次第に薬をもら、治不 おも  
治は病人の運命次第と、二日おき三日おきにちらち ち  
らと見まうて、療治油断する医者は、誠にたのもし りようち  
げなき下手医者也。上手にかかれば癒る病気も、下手 へた いしやなり  
にかかれば怪我するは歴然たること也。 けが れきぜん なり

ただ、義務的に脈をとり、適当に思いつきで薬を与え、治  
る治らないは病人の運命次第と、二日おき三日おきにちらつ  
と見舞って、治療に油断する医者、実に頼りがいのない藪 やぶ  
医者です。上手な医者にかかれば治る病気も、下手な医者に  
かかれば思いがけない事態になることは、明らかです。

故に子どもらが病氣といへば、其親かならず良医ゆえをたづねもとめて薬を用ひ、かならず下手医者にはかけぬものなり。君は父母なり民は子也。如才なる役人に預けて難義をさすること、仁君の甚おそれ給ふ所なり。たま

よき役人と申は深切なる医者もうすの病人の生死を身に引受て、療治に心を尽すがごとく、民の苦樂を身に引受て、昼夜世話をまめやかにする人を良吏とはいふなり。医者深切なれば、食をくひかけ、眠き目をこすりても、匙さじよ薬箱よと夜る夜中も厭いとはずかけ走る。これ如才なき医者也。じよさい

ですから、子どもが病氣になると、その親は必ず良医をたずねて、薬を求めて、必ず下手な医者にはかからないものです。君主は父母であり、領民は子どもです。その子どもを、手抜かりの多い役人に預けて、難儀をさせることは、慈しみ深い君主がもつとも恐れることです。

よい役人というのは、親切な医者あちははが病人の生死をわがことのように思って、治療に心をつくすように、領民の苦しみと樂しみを引き受けて、昼夜世話をこまめにする人を良い役人といえます。医者が親切であれば、食事中でも、眠っているときでも、薬箱を持って夜中でもいやがらずにかけつけていく。これが手抜かりのない医者です。

深切しんせつなる役人やくにんは馬うまも駕籠かごも捨て、歩行ほこうはだしにも  
なり、民たみの為ためを思おもへば苦勞くろう大義たいぎもわすれはて、風雨ふううかん寒さむ  
暑しよの界さかいもなく世話せわのとどくを樂たのしみに思おもふ人ひと、誠まことに  
忠ちゅうなる役人やくにんとはいふなり。火燧こたつに足あしをあたためて、  
病家まぢかねにて待兼まちかねるも思おもひやらぬは水みづくさき医者いしや也なり。頭づ  
痛つう疝せん氣きを申もう立て、願さいひ裁許さいきよの延引えんいんするもきのどく  
がらぬは情なさけなき役人やくにんなり。  
故ゆえに明君めいくん賢相けんしやうは人ひとをしるを最上さいじやうの智ちとし、誅ちゆう  
賞しょうに怠おこた給たまはぬを急務きゆうむとす。

親切な役人は、馬も駕籠もすてて、はだしになつても、領  
民のことを思つて苦勞や疲れも忘れて、風が吹こうが雨が降  
ろうが、寒かろうが厚かろうが、世話をできることを樂しみに  
思う人で、こうした人を、本当にまごころをこめて、よく  
つとめを果たす役人というのです。こたつに入つたままで、  
病人の家が待っていることを思いやらないのは、みずくさい  
医者です。頭がいたい、病氣だといつて、申し出のあつた用  
件を引き延ばしても相手を氣の毒がらないのは、なさけない  
役人です。

ですから、賢明な君主や賢明な家老は、人を知ることをも  
つとも大切な能力として、厳しく責めたてることと、ほめた  
たえることをおこたらないことを、急いでしなければならな  
い任務とするのです。

とむ ゆえ おご 富る故に奢れば、貧になるまで取上げれば自然と  
おごり こころえ 奢はやむと心得たる役人は、聚斂残賊の悪吏な  
り。食ふ故にふとり過れば断食させて肉をおとさん  
といふは下手医者也。

おご たのし 奢るうちは楽しみなるやうなれども、奢られぬやう  
になれば苦しき故におごらるるうちに儉約をして、  
いつまでもたのしみを失ふなど、教へ導く役人は公  
正忠貞の良吏なり。

ですから、豊かさからぜいたくをしているのであるから、  
貧しくなるまで取り上げてしまえば、自然とぜいたくもやま  
るだろうと心得る役人は、集めて治めるだけで、世間に害を  
あたえる悪い役人です。食べるから太りすぎるので、断食さ  
せてやせさせるというのは、へたな医者です。  
ぜいたくできるうちは楽しいようではあるが、ぜいたくが  
できなくなると苦しいので、ぜいたくができるうちに儉約を  
して、いつまでも楽しむことができるようにと教へ導く役人  
は、公平でかたよらず、よく仕え、節操を守る良い役人とい  
うのです。

食べすぎたべすぎ 食過ればふとり過すぎて病氣ゆえの出る故ゆえに、食くうるうち  
より食しょくをひかへて、いつまでも達者たつしゃに病ぬやうにせ  
よといふは、上手じょうず医者いしやなり。此間このかんごう毫毛ごうもうの違ちがひにて、君きみ  
を仁君じんくんにすると、君きみを不君ふくんにするとのわかれめなり。

食べすぎれば太りすぎて病気になるので、食べられるうちに食事をひかえて、いつまでも元気で、病気にならないようにしなさいというのは、じょうずな医者です。このちがいは、ごくわずかなことですが、君主を慈しみ深い君主とするか、そうでない君主とするかの分かれ目です。

花木の花末

はなき

はな すえ

○花木のはなを賞翫すれば、日除霜除をして虫を

とり鳥をおとして撫さすらぬばかりに大事にはす

れ共、かんじんの根に土かひ、こやしをいれる道を

しらねば色香の栄えを願へ共やがて枝葉も枯、花も

すがれて、見事なりし一木もいつのまにかは薪と

なること、根に心をつけざりしあやまち也。

国用の盈虚家産の貧富も又然り。根を忘れて枝

葉の栄を望み願ふ心より、富を求むとせしまに、

いつのまにかは貧になりゆくこと也。

花の咲くのを楽しもうとして、日よけ霜よけをして虫をと

り、鳥を追い払って、なでさするよう大事にはしても、一

番大事な、根に土を入れ、肥やしをやることを知らなければ、

花の彩りや香りの良さを願っても、やがて、枝も葉も枯れて、

花も枯れはじめて、みごとに花の咲いていた木も、いつのま

にか枯れてしまつて、たきぎになつてしまうのは、木の根の

面倒をみなかったからである。

国家の栄えることと衰えること、一家が貧しいか豊かかと

いったことも同じことである。根のことを忘れて、枝や葉が

繁ることを望む心持ちから、富を求めているあいだに、いつ

のまにか貧乏になつてしまうのである。

はなき はな さか ねが ねかぶ こころ  
花木の花の栄えを願はば、根株に心をつくるを  
せんよう かこく とみ ねが えいじよく じつい わきま  
専要とし、家国の富を願はば栄辱の実意を弁へ  
しるを基本とすべし。栄はさかえと訓じて美目なる  
こと也。辱ははぢと訓じて面目なきこと也。美目な  
ることは賢愚貴賤となくすき好む道也。面目なき  
ことは賢愚貴賤となく嫌ひ悪む道也。但しみめを  
好めども美目の実意をしらず、辱をきらへども辱の  
実意をしらず。故に富を失ひ貧を招く。口惜きこ  
と也。

花がみごとに咲くことを願うのならば、その木の根を養う  
ことが大事で、国家が豊かに栄えることを願うのであれば、  
栄と辱の本当の意味を知ってわきまえることを基本としな  
ければならない。栄は「さかえ」と読んで、見た目にも美し  
いことである。辱は「はじ」と読んで、恥ずかしくて顔向け  
できないことである。見た目にも美しいことは、賢い者もお  
ろかな者も貴い者も身分の低い者もだれもが、好むことであ  
る。恥ずかしくて顔向けできないことは、賢い者もおろかな  
者も貴い者も身分の低い者もだれもが、嫌ってにくむこと  
である。しかし、見た目にも美しいことを好む本当の意味を知  
っていない。また、恥ずかしくて顔向けできない恥の本当の  
意味を知らない。だから、富を失ってしまい、貧乏になる。  
残念なことである。

美目と辱との実意は、おのれおのれの天分を知る  
を美目とし、天分を忘るるをはぢとす。天分といふ  
は此世に生れたる程のものは、生れ出るより貴賤そ  
れぞれの身の分限定りて、上は王候貴人と生れ、  
下は農工商売と生れつきたる分限なり。  
されば此分限のうちにくところをとりしめて、分限  
の外に心を取逃さぬやうにと思ふ人は貴賤学不  
学によらず、げに尊とく愛たき人也。

美目と恥の本当の意味は、それぞれの天分を知ることを見  
目とし、その天分を忘れることを恥とする。天分というのは、  
この世に生れた者であれば、生れたときから身分の高い人、  
低い人、それぞれの身のほどが決まっております、上の者は、王  
や諸侯の身分の高い者に生まれ、下の者は、農民、職人、商  
人といった低い身分に生まれついた身のほどなのである。  
だから、この身のほどをよく知って、その身のほどをわき  
まえる人は身分が高いか、低いか、学問のある人か、ない人  
かによらず、たいへん尊くすぐれた人である。

またこのぶんげん うち こころ とり  
又此分限の内に心を取しむることをわすれ、

ぶんげん そと こころ とりのが ひと  
分限の外に心を取逃したる人は、貴賤学不学によ

らず、げに卑しく愛たからぬ人也。愛たき徳をつむ

ひと さか めで とく ひとなり めで とく  
人は栄え、愛たからぬ徳をつむ人は辱しめらる。

てんどう しぜんなり  
天道の自然也。

また、身のほどをわきまえず、それからはみだすような人

は、学問のある人かない人かによらず、たいへんいやしくお

とった人である。りっぱな徳〔精神の修養によってその身に

得たすぐれた品性〕を積む人は栄え、品位に欠けた人は、恥

をかかせられる。これが、天の自然の道理である。

ぶんげん うち ところ とり もうす まずほうこく きみ  
分限の内に心を取しむると申は、先邦国の君  
うま たま しもばんみん うやま どうと  
と生れ給へるかたは、下方民に敬ひ尊まれたまひ  
しょうがい くらい やすん たま なり  
て、生涯めでたき位に安じ給ふこと也。されば  
うやま どうと たま まずじこ くらく つぎ  
敬ひ尊まれ給はんとては、先自己の苦樂は次にし  
たま しもばんみん くらく だいいち せわ おも たま  
給ひて、下方民の苦樂を第一に世話に思ひ給ふは  
てんぶんなり このてんぶん うち ところ たま  
ずの天分也。此天分の内に心をとりにしめ給ひて、  
あきゆう しも たのし しも くるし くるし たま  
朝夕に下の樂みをたのしみ、下の苦みを苦み給  
せいきよう つつし たま ととき ばんみんそのおんどく した なつ  
ひ、政教を慎み給ふ時は、万民其恩徳を慕ひ懐き  
たてまつ ちよばんだい このきみ めで たま  
奉りて、千代万代も此君の愛たくあらせ給へとの  
みうたひことぶくこと、君の天分に応じて此上もな  
きみ め きみ てんぶん おう このうえ  
き美目なること也。

分限をきちんとわきまえて、それをはずれないようにする  
ということとは、君主として生まれてきた人は、国民に敬い尊  
ばれて、生涯りっぱな位におられることである。それで、敬  
い尊ばれるということは、まず自分の苦しみと楽しみはあと  
にして、国民の苦しみと楽しみの世話をやくという天からあ  
たえられた職分である。この天からあたえられた職分を、心  
にしっかりとって、朝も夜も、国民の楽しみを楽しみ、国  
民の苦しみを苦しみ、政治、教育を慎んで行なうときには、  
国民が慕ってなついて、いつの世までもこのよろこばしいこ  
とがつづくようにと、となえる。それは、天からあたえられ  
た職分として、このうえもなく美しいことである。

もし此天分の美目を美目とし給はず、此外に美目を求め願ひ給ふ時は、美目を失ひ恥辱を招くことなり。みめを求めて恥辱を招くと申ことは、たとへば宮室に金銀をちりばめ給ふは美目を思ひ給ふしわざなれども民の草屋は雨露もりて、風日を凌ぐ便りなき時は、金殿の美しきを見るにつけても、一入奢侈のつよきを譏り、政のからきを恨み嘆く。その恥いづくにか遁れ給ふべき。君の衣服に錦繡を重ね給ふは美目を思ひ給ふしわざなれ共、民は布子の綿もなく、雪霜を忍ぶ便りなき時は、錦衣の美しきを見るにつけても、一入奢侈のつよきを譏り、政のからきを恨み嘆く。其恥いづくにか遁れ給ふべき。

もし、この天からあたえられた職分を、美しいものとせず、ほかに美しいものを求めようとすれば、はずかしめを受けることになる。美しさを求めて、はずかしめを受けるといふことは、たとえば、君主の屋敷に金銀をちりばめることは、美しさを求めてのことではあるが、国民の家が、雨漏りして風をしのぐこともできないときには、その金銀でかぎりたてられた屋敷をみて、ひときわぜいたくであることをそしって、政治の悪さをにくんでなげく。その恥をどのようにするつもりか。君主の衣服に金の刺繡をすることは、美しさを求めてのことではあるが、国民が布の綿入れもなく、雪や霜の冷たさをしのぐようとしていたときには、その金の刺繡の衣服を見るたびに、ひときわぜいたくであることをそしって、政治の悪さをにくんでなげく。その恥をどのようにするつもりか。

君きみの食膳しょくぜんに八珍はつちんを備へ給ふは、甘味かんみを好み給ふ  
故ゆえなれども、民たみは稗ひえの飯めしにもあかず、飢餓きがを凌ぐ貯たくわ  
へなき時は、佳肴かこうのうまきを見るにつけても、一入ひとしお  
奢侈しゃしのつよきを譏り、政せいのからきを恨み嘆く。其その  
恥はじいづくにか遁れたまふべき。君きみの出入しゅつにゅうに行装ぎようそう  
をかざり給ふは、美目みめを好み給ふ故なれども、民たみ  
親子おやこ兄弟きょうだいをすて、夫婦同居ふうふどうきよもならぬ時は、行装ぎようそう  
立派りっぱを見るにつけても、一入ひとしお奢侈しゃしのつよきを譏り、  
政せいのからきを恨み嘆く。其その恥はじいづくにか遁れ給  
ふべき。是この栄さかえを願ねがうて辱はじを招まねく。みな天分てんぶんを忘れ  
て栄辱えいじよくをとり違へ給ふ故也。

君主の食事に豪華な料理をそろえることは、おいしい食べ物を好かれるからのことではあるが、国民が稗ひえのめしもたべることができずに、飢えをしのごうとするときは、その料理を見るたびに、ひときわぜいたくであることをそしって、政治の悪さをにくんでなげく。その恥をどのようにするつもりか。これは、さかえることを願って、恥を招くようなことである。みな、天からあたえられた職分をわすれて、栄えることと恥とを取りちがえているからである。

君の宮殿は傾きたれども、民の家居は軒端た  
だしく、君の衣服は垢つききたれども、民の衣類はあ  
たたかに、君の食膳は水くさけれども、民の食物  
はことかかず、君の行列は見苦しけれ共、民に飢餓  
の患なくば、是を見聞する人、何をか譏り何を  
か笑はん。自国の民の懐くのみならず、他所他国の  
人までもうらやみ尊とみ奉らば、誠に天分のほ  
まれ此上もなき美目といふべし。  
天分を忘るるより榮辱を取違へ、辱まじきこと  
をはちて財用を費し、辱べき道をはちずして財用  
を惜まず。国の衰敗するは古今みな然り。

君主の屋敷はかたおいても、国民の家はきちんと建ってお  
り、君主の衣服は垢がつき、つぎはぎだらけでも、国民の  
衣服はあたたかく、君主の食事は粗末でも、国民の食べ物は  
じゅうぶんがあり、君主の行列はみぐるしいけれども、国民  
が飢える心配がなければ、これを見た人が、どうしてそしつ  
たり、笑ったりするでしょうか。国民がなつくだけではなく、  
他国の人までが、うらやみ敬えば、実に天からあたえられた  
職分の、このうえもない名誉なことである。

天からあたえられた職分をわすれて、榮えることと恥とを  
取りちがえて、恥じなくてもいいことを恥じて、余分な経費  
を使い、恥ずかしく思わなくてはいけないこと恥じないで、  
余分な経費を使う。国家がおとろえる原因は、むかしからい  
まにいたるまでみな同じである。

よそめ 余処目はいかばかり見苦しく共、内の備へ丈夫  
なれば、受持給ふ家国は子孫万世に伝へて、人に  
窺るべき氣遣ひなし。余処の人は不悦とも、内  
の人が悦び慕ひ奉れば、何ひとつ辱べきことな  
し。是榮辱の分を明らかに弁へ給ふ故に、堪へ難  
きことをもこらへ給ひて、無益の費用に困しみ給ふ  
憂ひなし。されば国の富は是を基として得給ふべき  
こと也。臣は君を以て心とすること自然の勢ひ  
也。故に君上の好み給ふ処は臣下令を待ずして  
行ひ、君上の嫌ひ給ふ処は臣下禁を待ずしてや  
む。古今の鑑歴然たり。

よそから見てとても見苦しくても、国内のそなえがきちんと  
しておれば、受けついできた国家を子孫に永久に伝えて、人  
からどうこう言われることもない。よその人が喜ばなくても、  
国民が喜んで慕えば、なにひとつ恥じることはない。この榮  
えることと恥とを、きちんとわきまえるから、堪えがたいこ  
とも堪えて、無用な経費を使う心配もない。ですから、国家  
を豊かにするには、これを基本にすべきである。  
家臣が君主を心とすることは、自然なことです。ですから、  
君主の好むところは、家臣は命令をまたなくても実行し、君  
主のきらうことは、禁止されなくてもやめる。これは、むか  
しからいまにいたるまであきらかです。

士は万石千石百石十石の身上も、是亦天分を弁  
へしりて、栄辱を取違へざれば、無益のかざりに  
俸禄を費さず。身分相應の富を保ちて、分のたため  
貧窮に至らず。たとへばさねよき鎧を用意したる  
は心懸よき士也。但し甲冑の修理は少金にて、一  
度すれば五年十年は物入なし。太刀刀は中身だにた  
しかなれば、子孫までも用前の害なし。

武士は、万石、千石、百石、十石の身の上でも、これまた  
天からあたえられた職分をわきまえ知って、栄えることと恥  
とを取りちがえなければ、無用なことに俸禄をついやすこと  
はない。身分相應の富をたもっておれば、身分の立たないよ  
うな貧乏にはならない。たとえば、よい鉄の鎧を持つこと  
は、心がけのよいことである。それで、甲冑の修理は、少  
ない経費ですみ、一度すれば五年、十年はもつ。太刀、刀は  
中身さえしっかりしておれば、子孫までも持ち伝えることが  
できる。

いふくききょう りっぱ この ついえかぶん しゅう  
衣服器用に立派を好めばその費過分にて、終  
しんものずき やむこと さいし ほうようふそく みめ  
身物好の止事なく、妻子の奉養不足なきを美目と  
して、奉公の差支になるを恥ず、給使する下女の  
おお みめ せいし ば みつづ げじよ  
多きを美目として、生死の場にて見続くべき侍  
わかとう げんしょう なかまこもの たちまわ さむらい  
若党を減省し、仲間小者の立廻りよきを美目とし  
ひやと ゆみやり あずか  
て、日雇ひのものに弓槍を預ることをはぢず。出入  
ちやうにん ちゃ ふるま みめ ちぎよう ひやく  
の町人に茶を振舞ふを美目として、知行の百  
しょう そでごい は いふく あか みめ  
姓の袖乞するを恥ず。衣服の垢つかぬを美目とし  
て、呉服商人に延引をわぶるを恥ず。  
ごふくしやうにん えんいん は

衣服や器具にりっぱなものを好めば、その経費はかさみ、  
生涯そのような好みはやまることがない。妻子を養うことに、  
なに不足がないことを美しいこととして、経費をそれについ  
やして、君主につかえることに差し支えることを恥じない。  
下女が多いことを美しいこととして、戦の場に引き連れてい  
く家来を減らし、仲間づきあいを美しいこととして、日雇い  
の者に弓、槍をもたせることを恥じない。出入りの町人に、  
茶をふるまうことを美しいこととして、治めている土地の百  
姓がものもらいをしても恥じない。衣服に垢のつかないよう  
にすることを、美しいこととして、呉服商人に支払いの延期  
を願うことを恥じない。

かやうにかぞへみれば美目と恥との弁へ明らか  
ならぬこといくばくといふ数もしらず。一生辛苦  
をして快樂なる心はなく、窮鬼に責られて身を  
終ることは是非もなき次第なり。国は君臣栄辱を明  
らかに弁ふれば、財用満足の基本たつ。農工商賈  
は上に忠直の奉行頭をだにたてて取扱はず  
れば、上の好次第にうつりかはる物故に、君上の  
つとめは栄辱を明らかに示して、善良の役人を  
えらみ給ふのみにて、鎖細なる役筋の末々までを  
察し給ふ道はなし。

こうしてかぞえていくと、美しいことと恥とのわきまえが  
できていないことは、かぎりがない。これでは、一生苦労し  
て、楽しい心はなく、貧乏神に追われて生涯を終わることも  
しようがない。国家は、君主と家臣が栄えることと恥とをあ  
きらかにわきまえれば、財政の基本をたてることができる。  
農民、商売人については、忠義で正直に仕える奉行頭をさせ  
立てて取り扱わせれば、うまくいくので、君主の務めは、栄  
えることと恥とをあきらかにしめして、良い役人を選ぶだけ  
である。こまかな職務のことまでも考えることはない。

と かく れんち みち ただ さいよう きよひ はぶ  
兎にも角にも廉恥の道を正して財用の虚費を省  
とみ ねが とみ いた ひん にく ひん  
き富を願はずして富に至り、貧を悪まずして貧を  
まつりごと  
いづる 政 をたてたきものなり。七年の病と見れ  
さんねん もぐさ こころがけ  
ば三年の艾を心懸ること、もどかしきことのやう  
おも いま よ あら  
に思ふは今の世のみに非ず。しかしながら三年の  
もぐさ ようい しちねん や ひと よんねんめ  
艾を用意すれば、七年は病むはづの人も四年目に  
へいゆ  
は平癒すべし。もどかして用意せずば、七年目に  
なお がた やまい なる いしや ちりよう  
は治し難き病と成べし。医者の治療のとどかぬ  
いた びようじん だいたい ふようじよう やめ ひと おお  
に至る病人は、大体は不養生を止め人に多きも  
なり  
の也。

とにかく、心が清らかで、恥を知る心が強いことを押し進  
めて、経費のおだをはぶいて、豊かさを願わないけれども豊  
かになり、貧しさをいとわずに貧しさから抜け出る政治を行  
ないたいものである。治るまで七年かかるような病気だと思  
えば、三年間にわたって治療のためのもぐさをすえることを  
心がけることである。じれったく思うのは、現代のことだけ  
ではない。しかしながら、三年間にわたる治療のためのもぐ  
さを用意しておけば、治るまで七年かかるような病人でも、  
四年目には治る。じれったいからと、三年分のもぐさを用意  
しなければ、七年目には、もう手だてのほどこしようなない  
ことになってしまう。医者の治療が及ばないような病気にな  
ってしまう人は、だいたい、不養生をやめない人に多いも  
のである。

## 「対某侯問書」

ぼうこう と こと しょよ  
「某侯の問いに对える書」

べっしをもつてもうしあげそうろう。 老衰の儀手筆相乖キ、字形も不  
以別紙申上候。 せい もんごん ぜんごつかまつ ちようふくおお かじよう しだい  
正、文言も前後仕り、重複多く、ケ條の次第も  
あいどこの もうさず ふけい、いたりおそれいたりたてまつりそうろう。 あらためてかき  
相調ひ不申、不敬の至奉恐入候。 改書  
つかまつりそうろう。 ごらんにいれたてまつるべきはず。 ござ そうらえども  
仕候て可奉入御覧筈二御座候得共、  
せいしんよわ まかりなり いくど あいしたためなお もうしそうろうぎ はなはだ  
精神弱ク罷成、幾度も相認直し申候儀、甚  
もつてなんぎ まかりありそうらえ ずいい ひつきつかまつりそうろう  
以難儀二罷在候得ば、随意に筆記仕候ま  
でにて、差上申候事、何分二も奉蒙御忍恕  
さしあげもうしそするうこと なにぶん ごじんじよこうむりたてまつり  
たくぞんじたてまつりそうろう  
度奉存候。

「ある君侯の質問への回答書」

別紙によって申しあげます。年をとって、心身のはたら  
きがおとろえましたので、筆もうまく使えず、文字の形も  
整わず、文章中の語句もつながらず、同じことが何度も重  
なることが多くあって、箇条書きの内容も整っておらず、  
礼を欠くことを恐れ入ります。

改めて書き直してご覧に入れるつもりでしたが、気力や  
気持ちが弱くなりましたので、何度も書き直しましたのですが、  
とても苦勞しましたので、自分の思うままに筆記しまして  
差し上げますことを、どうかお許しくださいますようお願い  
い申し上げます。

ひとつおくに

一御国ニ学問所ヲ御造立被遊候御本意は、御

先祖様よりの風俗ヲ失ひ不申、万人安堵仕

候様ニ被遊度と申所極意にて、人を利口

発明ニ被遊度と申所にては無御座候。元来

御国の旧風質実篤行にて、諸家ニ勝り申候事

多く御座候。

乍併太平式百年の恩化次第ニ奢靡逸楽ニ移

り候処多く相成候付御政事も六ヶ敷罷成

候処を御氣の毒ニ被思召候故ニ、学問と

申事ヲ第一ニ御引立テ被遊候御事ニ御座候。

一、お国に学問所を設けた本来の目的は、ご先祖様からの

風俗（生活上の習わしやしきたり）を、失わないように

して、すべての人がその土地で安心して暮らせるように

することが、核心となる大切なことからであって、人を

賢くするということではございません。もともとお国の

古くからの風俗は、かぎりけがなくまじめで、人情に厚

く、ほかの国より優っていることが多くございます。

とはいえ、平和な時代が二百年間続いて、次第に身の

ほどを過ぎたぜいたくをして、気ままに遊び楽しむこと

が多くなってきて、政治もおつかしくなってきたことに

心を痛めておられることから、学問というものを第一に

目にかげられたこととございます。

学問つかまつらずそうろうを不仕ひとびとがけんがい候はては人々我見我意のみにつのり候かみて、上の御仁徳これなきゆえと申所そのヲ思ひめぐらし申事おぼしめされ無之故そのニ、其思ひめぐらし候心持おほしめされの生じ候様さそうらえニと被思召候故さそうらえニ御座候おくに。左候かくふう得ば御国の学風まずは先第一人情あいなりの質実ふぎようきよしよくニ相成これなきように、浮行虚飾あそばされたきの無之様ぞんじたてまつりニ被遊度御儀ただと奉存候た。但し学問たヲ致シ候たと申日もうすひニは、四書五経わきまヲよみ習そうろうひ、夫しやうしやうあてより其義理それヲソロソロその弁わきまへ候そうろうて、少々宛しやうしやうあてにても身二行もうすことひ慣もうすことひ申事二御座候もうすこと。

注 義理とは、物事の正しい道筋。人間のふみおこなうべき正しい道。

道理。

学問をしなくては、人びとは自分だけの狭くかたよった意見や見方だけがいつそう強くなって、君主の人びとをいつくしみ愛する徳〔すぐれた品性〕ということに思いをめぐらすということもなくなるので、そのことに思いをめぐらす心持かみちが生まれてくるようにとお考えになったからでございます。そうであれば、お国の学問上の傾向や特徴は、まず第一に人情あひながかぎりけがなくまじめで、浮ついて、実質じしつを伴わずに外見げんげんだけをかぎりたてるということのなようにしたいと思おもいます。ただし、学問がくぶんをする日には、四書五経〔儒教の基本書。大学・中庸・論語・孟子の四書と易経・書経・詩経・礼記らいぎ・春秋の五経〕をよみ習まって、そこから義理ぎりを徐々じゆじゆにわきまえて、少しでも身みにつくようにすることをございます。

但ただシ書物ヲよみ習ひ候へば、自然とむかしむか

しの事も相知レ、人のしらぬ道理もソロソロ合点がてん

参り、善悪邪正も弁別 仕 候様ニ相成候へば、

凡人ニは勝レ知恵も開キ、口モキカレ、人ニも見

コナシ不被申様ニ相成候事勿論ニ御座候。但シ此

所より不覚自慢の心も生じ、我を高ぶり候事にも

移り申候事、是又自然の病氣ニ御座候。

仍これによつて之善良の師長しちようヲ御立テ、其人そのひとの言行げんこうを見

まね聞まね 候様ニ被思召候て、師役しやくを御立テ

被遊候事ニ御座候。

ただし、書物を読み習えば、自然におかしむかしのこと

もわかつて、それまで知らなかった道理も徐々に納得して、

善いこと悪いこと、よこしまなこと正しいこともわきまえ

るようになるので、普通の人よりはすぐれて、知恵もつき、

会話もし、人からあなどられるようなこともなくなるので

ございます。

でもそうしたことから、意識せずに自分を誇る心も出て

きて、相手を見下して、高慢な態度をとるようになるのも、

これまた自然の病氣でございます。

ですから、正直で性質の良い先生と目上の人を立てて、

その人の話すことと行ないをまねするようにとお考えに

なつて、先生となる人を立てられることとございます。

左候へば先ヅ師と相成候人、此所ヲ能心  
得可申事第一二御座候。

扱人を教へ候ても百人が百人一様二は不参もの、  
人心は各々別なる事は不及申上候。孔夫子三  
千の弟子七十人の親炙弟子達も、人々心慮も別段  
所行も殊異にて、尽ク一統二は相見不申候。  
乍併聖人の徳化にて、何レも善良君子ニ被相成、  
大は小、小は小、ソレゾレニ世界ノ用ニ立ツ人斗  
と相見申候。聖人の御徳ニテモ御一様ニ教へ  
立テラレ候事は不相成ものかと可存候。併シ人が  
善良ニ相成候処ハ一同ニ御座候。

そういうことですから、まず先生になる人のこのところ  
〔正直で性質の良いこと〕をよく心得ることが第一でござい  
ます。さて、人を教へても百人が百人を同じようにすること  
はできません。人の心はみなちがっていることは、言うまで  
ありません。孔子様の三千人の弟子も、七十人の親しく接  
してその感化を受けた弟子たちも、それぞれ考えも行ないも  
みな違っており、皆が統一されているようにはみえません。  
でも、孔子様の徳によって教化されて、皆が正直で性質の良  
い教養人となり、度量の大きい人は大きいなりに、そうでな  
い人はそれなりに、それぞれが世界の役に立つ人ばかりであ  
るようになれます。孔子様の徳によってもすべての人を同じ  
ように教へることはできないように思われます。しかし、皆  
が正直で性質の良い人になったことは同じでございませぬ。

ひとつしちよう

一師長の人を教へ候事は、他国はトモアレかくも

あれ、御国の御為おんためニなる様ニと申所肝要もうすところかんようとぞんじたてまつり

奉存候。他家他国のまねをするなど御定めおさだ

被置候事は、御先祖の深キ思召と奉存候。但しただ

他所他国の風を学ぶなど被仰置候得ばとて、おおせおかれられそうらえ

よその国の善事よそヲするなど申候事ニは有御座間敷ござあるまじく

候。余処よその風ふうヲ致し候て、御国の人情にあはぬこ

とはするなど申事もうすことニ可有御座候。孝悌忠信仁義こうていちちゆうしんじんぎ

礼讓れいじようは何国どのくににても人の悦よろこぶ道ニ御座候。

一、先生や目上の人が、人を教えるということは、他国のこ

最も必要だと思えます。他家、他国のまねをするなど定め

られていることは、ご先祖の深いお考えだと思えます。で

も、他家、他国のやり方を学ぶなど言われたからといって、

よその国の善いことをまねするなどということではありま

せん。よそのやり方をして、自国の人情に合わないことは

するなどということでございます。

父母に孝行をつくし、兄など年長者によくつかえること。

真心を尽くし、偽りのないこと。人間が守るべき道徳。礼

儀正しくへりくだった態度をとることは、どの国において

も人が喜ぶ道理でございます。

但しただ富貴ふうきなる家やにては被下物取扱くだされものひもゆたかに

御座候。貧乏いちょうなる国くににては至いたつて少く御座候。是これも

一樣いちよう二ならぬことと被存候ぞんぜられ。

併しかシ学問がくもんを致りし理義明りぎかに相成候得ば、多少厚

薄うすはさのみ怨うらミツラミもなく、一統いつとう二取扱にの能よキ

は難ありがたく有奉存候事、ソレガ学問がくもんを致りし理義りぎヲ弁わきまへ

申候人の所得しゆとくニ御座候。此所このところヲ弁わきまへ候様ニ教へ

可申事もうすべき、師長の第一だいいちと奉存候。有教無類おしえありてゐないと

被仰候おおせられかと奉存候。

ただし、財産があつて、しかも身分の高い家では、いただ

くものも取り扱うものも多くございます。貧しい国では、そ

れがとても少ないのでございます。このことも同じではござ

いません。

しかし、学問をして道理と正義を明らかにするようになれ

ば、多いか少ないか、物事の程度が厚いか薄いかということ

は、それほどいろいろのうらみもなく、すべて取り扱い方

がよくなることはありがたいことでございます。それが、学

問をして道理と正義をわきまえた人がその身に得たもので

ございます。このことをわきまえるように教えることが、先

生や目上の人の最も大事なことだと思います。このことを孔

子様も「教え有りて類無し（教育によって、人間の区別がな

くなる）」と、おっしゃられたことと存じます。

一 師長と申候へばとて、我計是非二是非二善キ事わればかりせひ

ハ不相成候。あいならず 聖人万世の師といへども得不被成様えなられずよう

二 相見申候。あいまえさるこよう 但し人を教ユルものは人と共々ニただ

善事ヲ致度、人と共々ニ悪事は不致様ニ心得申よきこと いたしたく いたさず

候て、教へ申度事と被存候。もうしたきこと 發明ものも愚鈍ぞんぜられそうろう はつめい ぐどん

なるものも、御家中の人ニ御座候へば、發明は発

明丈ニをしへ御用ニ立テ、愚鈍は愚鈍丈ニ教へだけ ごよう ぐどん だけ

戒て、刑辟ヲ受ヌやうにと申ことかと奉存候。いましめ けいへき

一、先生と目上の人だからといっても、自分だけがどんなこ

とがあっても、どんなことがあっても善いということはある

りません。孔子様が永遠の先生であるといっても、そうい

うことはないように思います。ただし、人を教える人は、

人とともに善いことをして、人とともに悪いことはしない

ように心得て教えたいものです。利発な者も愚かな者も、

ご家中の人でございしますので、利発な者は利発な者だけに

教え、愚かな者は愚かな者だけに教えて、禁を犯したり、

失敗したりすることのないように、前もって注意を与えて、

刑罰を受けぬやうにとすることかと存じます。

ひとつにんじよう おなじ よろこびふどう  
一人情は同を悦び不同ヲにくみ候事、無 扱  
こと ござそうらえどもそのどころ  
事に御座候得共其所を勉強して同異の論無之  
よう  
様ニと申事衆人の師長の役ニ御座候。我好ム所  
ひざ くわ われにく  
ヲ膝ニ加へ、我悪ム所ヲ淵ニおとしいるる様いた  
ふち  
すは、道徳ヲ教ル人の任ニは無之候。善ヲ賞し悪  
にん これなく ぜん しょう あく  
ヲ退ケ給ふことは、人君と大夫ノ職ニ御座候。  
しりぞ たま  
そのじんくんたいふ ふつごう ことこれあり  
其人君大夫不都合の事有之候はば諷諫して何卒  
ふつごうこれなきよう ちゆう つく もうす  
不都合無之様ニと、忠ヲ尽し申は儒臣の職分ニ  
御座候。

一、人情というのは、同じであること喜んで、同じでないこ  
とをにくむというのは、どうしようもないことですが、そ  
このところを勉強して、同じこと異なることの論議がない  
ようにすることが、すべての人の先生と目上の人の役目で  
ございます。自分の好きなことは膝に抱きかかえ、自分が  
憎むことは淵においやるようになるようなことは、道徳を  
教える人の任務ではありません。善いことをほめたたえ、  
悪いことをしりぞけることは、君主と重役の職務でござい  
ます。その君主と重役に、道理にあわないことがあれば、  
遠回しに忠告して、どうか不都合なことがないようにと、  
真心をつくすことは、儒臣の職務でございませす。

ひとつとき ちらん ほどこすところ よろしきところ まずだいいちに

一時二治乱あり、所施二宜所アリ。先第一

こころえもうすべき

らんせ もうす

そんび

心得可申事二御座候。乱世と申は人の尊卑二

がら しんそ

いくさ

もよらず、続キ柄の親疎ニもよらず、今日戦ニ

勝チ我国ヲ強クスル人ヲあげ用ユル事ニ御座候。

そんび ぶんげん

さだま

治世と申は人々の尊卑分限ヒシト定リアリテ、

わる

おこなわ

我国が悪ひとて人の国へも行レズ、トテモカク

げち したが

もうさず

テモ君主の下知ニ随ひ不申候ては、一日も立ち

こえそろうこと

ごがんりきしだい

不申候。分限ヲ超候事も、主君の御眼力次第に

しも

ぞく おり

うらむべきこと

あいならず

て、下二属シ居候ても可恨事ハ不相成候。

一、「時の流れには、平和なときもあり戦乱のときもある。

それに応じて、行なうべきことがある」ということを、まず最初に心得ることをご言います。乱世のときには、身分や続柄にかかわらず、今日の戦に勝って、自国を強くする人を用いることをご言います。平和な世にあつては、人びとの身分、分限〔身のほど〕がきちんと定まっているので、自分の国が悪いからといってよその国へ行くこともできないので、とにかく君主の命令に従わなくては、一日もくらすことはできません。分限をこえることも、君主の見分ける力次第であつて、下に属しているからとうらむことはできません。

よつてたいふ  
扱大夫は大夫二なり、士は士ニテ御奉公ヲ仕ル  
ほか これなく  
より外は無之候。大夫二挙用 仕 給へば、大夫  
しよさ  
の所作ヲ致し、士ニ被成候て御用被成候得ば、  
なられ  
士ニテ生涯をとなく相勤メ、心底一杯ニ忠実を  
あいつと  
尽し可申事もうすべき学問いたし候、人の安楽なる所ニ御座  
べんべつ  
候。是を弁別なく時ヲ恨ミ上ヲソシル人は不良の  
たくさん  
人ニ御座候。其不良の人の沢山ニならぬやうニ教  
みちびい のこ  
へ導て遺し可申事、師の職分しよくぶんにニ御座候。

ですから、重臣は重臣として、士は士としてご奉公するし  
かありません。重臣に挙用されたならば、重臣としての行な  
いをし、士として御用を言いつけられたならば、士として生  
涯おとなしく勤めて、心いっばいに苦勞をおします仕えるこ  
とを学ぶことが、人として安楽なことをございます。  
このことを、わきまえて区別することがなく、時代をうら  
み、上をそしめる人は、品行の悪い人をございます。こうした  
品行の悪い人が多くならないように教えて、導くのが先生の  
職務でございます。

ひとつがくかんがくせい なりわい

一 学館学生の業は四書五経を素読シテ、文字

くんでんただしく

訓点正敷よみ覚えさせ、次第二講釈を承り、

わきま

ソロソロ義理ヲ弁へ知りテ、チト宛も身行を

いたさせ

習慣為致候て、其うち奇特の者ヲ御褒メ可被遊

事二御座候。

もうす

詩文ヲ習ハセ申ことは、心情をのべ辞儀ヲシヲラ

ふうがなくさつぷうけい

シク作り覚え、無風雅殺風景ニナラズ、其功ニよ

ここん

り古今の治乱興廢、人情ノ厚薄をも弁へ知べき

ゆさん

遊散二御座候。

一、藩校の学生の営みは、四書五経を素読して、文字の訓

点を正しく読み覚えて、徐々に講義を受けて、ゆっくり

と義理をわきまえ知って、少しでも身の行ないを習慣に

して、そのなかの行ないが感心な者をほめられることで

ございます。

詩文を習わせるといふことは、心情を表現し、お辞儀

をしおらしくすることを覚えて、みやびな趣がなく、お

もしろみがなく、興ざめのするようにならず、その

功績によって、おかしから今にいたる治世、乱世、興隆、

廢絶、人情の厚い薄いをもわきまえ知るための遊びでござ

います。

上手は秀才、下手は不才の差別迄にて、サノミ

国政の利害ニは与り不申候。但し辞と申ものは

申様にて人心を感じ候事妙なるものニ御座候得

ば、善良の心ヲ長じ申様ニ心得申度事ニ御座候。

狂言妄語当座の遊戯と心得申候得ば、利益は少

く損害は多キことニ御座候。

上手な人は秀才で、下手な人は才能がないだけであって、

それほど国政の利害には関係しません。ただし、文章とい

うものは、書き表し方によって、人が心を感じる何ともい

えないものでございまして、善い心が大きくなるように心

得たいこととございします。道理にはずれた言葉や行為やう

そいつわりを言うことを、その場の遊びだと理解してしま

うと、利益（得るもの）は少なく、損害（失うもの）が多

いものでございします。

損害と申はきようごうじふ 驕傲こころを 自負ちようの心ヲ長ジ、詩ヲ作り

文ヲ書キ得ぬ人は人にて無之様これなきようにニ見下し候て、

夫それよりは人の詩文ヲホメソシリ候事が面白ク相成

候時は、人の徳ヲ損じ不計害はからずがいヲ生ジ申事しよう、古今もうすこと

沢山たくさんに有之候これありそうろう。

損害といひますのは、きようごう 驕傲、（おごりたかぶり、ほし

いままにふるまう）、自負（誇らしく思う）の心が大きく

なつて、詩を作り文章を書くことのできない人を、見下す

ようになつて、それから、人の詩や文章を誉めるのがお

もしろくなるようになつてしまつと、人としての徳をなく

してしまい、思いがけず、害となつてしまいます。そうし

た例は、昔から今にいたるまでたくさんあります。

詩文は心に思ふ所不申してはいられぬ人情二候  
得ば、其思ふ所不好ら候得ば申出ス言葉も  
豪謾不敬多キものに御座候。左候得ば上手もよ  
し下手もあしからず、必竟心の存する所真情  
ヲ取失ひ不申様にと申所が、作者の本意ニ御座  
候。

左候得バ先々経書ヲ深切ニよみ、一句一言にても、  
心ニ会得致し候事ヲ言ニ言ヒ、身ニ行ひ候様ニ  
致度事ニ御座候。

詩や文章を作るということは、心に思うことを、表わさずにはおられない人の情ですので、その思うところが善くなければ、出てくる言葉も、傲慢（おごりたかぶって人を見くだすこと）、不敬（敬意をはらわず、礼を欠くような言動をすること）になることが多いものでございます。このようなことですので、上手でもいいし、へたでも悪くありません。結局、真心を失わないようにすることが、作者の本来の目的でございます。

ですから、まず経書を深く読み、そのなかの一句でも一言でも、心から納得できるようにと、繰り返し言い、その人自身が実行できるようにしたいものでございます。

こんにち

今日治世の分限ヲ忘レ、直すぐにむかしむかしの人の

やう二なりたく存じ候は、万端二害ヲ生じ申候。

書ヲよみ申時は人の世二立チ、死スル迄無難までぶなん二渡

り可もうすべく申本文は、紙一枚二幾所いくどころも記し有之候。

ソレヲ全まったク身二行ひ言二出シ候は、賢人君子二

候得共、左様さようにはなられざること二候得者、一

ツニツ宛モいたし習ひ言覚へ候て、君子ノ仲間ニ

入り申度ことニ御座候。

現在のおだやかな世の中での身の程を忘れてしまつて、す

ぐに、むかしむかしの人のようになりたいと思うことは、

すべてのことがらに害が生じます。書物を読めば、生涯無

難に暮らせる本文が、一ページのなかに何カ所も書かれて

います。

それを、身に行ない、言葉にだすのが、賢人であり教養

人ですが、そのようにはできませんので、ひとつでもふた

つでも学んで、言葉を覚えて、教養人の仲間になりたいも

のでございます。

入り入テは孝、出テハ悌とよみ覚へ申候得ば、不及迄  
これも是ヲ心がけ可申事、言忠信行篤敬と有之候  
もうすべき得ば不及迄も是ヲ守り可申事、ソレヲ不負所学  
まなぶところにそむかずトハ申候。書物ニテハ朝夕よみ候得共一向二言行ハ  
いっこう其所とは違ひ申候ては、そむ尽ク学ぶ所に負キタル  
そのところ人にて、不良人ニ御座候。此道理ヲ能ク弁へ可申  
このどうり事、書生の業 弁へサセ申度が、師長の職分ニ  
なりわい御座候。わきま

家にあつては孝（両親を敬い、子としての道を尽くすこと）、  
 外へでたら悌（兄や目上の者に素直につかえること）と、読  
ていみ覚えたならば、およばないまでも、それを心がけること。  
 言葉は、忠（真心をこめて物事をする事）、信（いつわらな  
 いこと）、行ないは、篤敬（人情に厚く慎み深いこと）、とあ  
 ったならば、およばないまでも、それを心がけること。それ  
 を、学んだことにそむかない、というのです。  
 書物を朝夕読んで学んでも、まったく言うことと、行なう  
 ことが、違つていては、すべて学んだことにそむいている人  
 であつて、品行の悪い人でございます。  
 この道理をよくわきまえるようにと、学生のなすべきこと  
 を、わきまえさせるのが、先生の職務でございませう。

ひとつみ ぶんげん これあること わきま もうさずそうらえ

一身二分限の有之事ヲ弁へサセ不申候得ば、

人々ノ人欲ニテ、人ヨリは尊くなり、人よりは富

有ニナリ度ものにて、いつか分限ヲ忘レ候より、

不法不埒も出来り学問の害夥敷、終ニは身ヲ

失ひ生を亡し候人も有之事ニ御座候。所謂論

語よみの論語しらずニならぬやうニ、学度教へ

度事ニ御座候。

一、身のほどがあることをわきまえさせなければ、人々は

欲によって、人よりは尊い者になりたい思い、人よりは

金持ちになりたいと思うものなので、そのうちに、身の

ほどを忘れてしまい、人の道にはずれ、ふとどきなこと

をするようになり、学び習うことへの害が、とても多く

なり、しまいには身をほろぼしてしまうような人もでて

くるようになるのでございます。だから、よく言うよう

に、「論語読みの論語知らず（書物の内容を頭で理解する

だけで、それを社会生活の中でどのように実践すべきか

に思い至らないことのたとえ。）」にならないように、学

び、教えたいたいものでございます。

扱師長と申者は、先人二信セラレ愛セラレズ  
さてしちよう もうすもの まずひと しん あい  
まいらずこと  
 シテハ不参事二候。人二信愛セラレ候得ば、悦服  
いけい しよう もうすことしぜん  
 して畏敬ノ心も生じ申事自然ニ御座候。人を  
えつぶくいたさせそうろうこと  
 悦服為致候事は、第一言語容貌ヲ慎ミ可申  
おんじゆうとんこう  
 事二候。溫柔敦厚は詩ノヲシヘナリと有之候。  
もうすひと このところ よくこころえ もうすべきこと  
 詩を作り申人は此処を能心得可申事ニ御座  
このば はいりそうらえ そのじんぶつ  
 候。此場より詩ニ入候得ば、其人物モいつとな  
おんわ  
 く温和ニナルベキことニ御座候。我慢我執ツヨ  
がまんがしゆう  
 クナリ候は詩のワキ道へ入りタル人ニ御座候。  
そろう

さて、先生という者は、まず人に信用されて愛されなければいけません。人に信じ愛されるようになれば、心から喜んで従い、心からおそれ敬う心も生まれ出てくることは、自然なことでもございます。人に心から喜んで従わせるのには、まづ顔つきをつつしむことです。おだやかでやさしく、誠実で情にあついというのは、詩の教えといえます。ですから、詩を作る人は、このところをよく心得ることでもございます。こゝうした心得から詩を作るようになれば、その人もいつとはなく、やさしくおだやかになるのでございます。強情で我をおすことが強くなるのは、詩の脇道へ入り込んでしまったからでございます。

詩ヲ学ぶも文ぶんを作ルモ、君子くんしノ所作しよさニ御座候。

君子はイカナル人ヲ云フ、小人しやうじんは如何いかなる人を云

フト申もうす所ところヲ弁わかまへ申度事もうしたきことニ御座候。人のよくなる

様ようニあしくならぬやうにと、古聖賢こせいけん名言めいげんを申残もうしし

置おかれ候そうろうて、其理義そのりぎヲさへ弁わかまへ知り候得およばずば、乍お不及よばず

其通りニ不致いたさずしてはならぬ事ことニ御座候。其理義そのりぎヲ

弁わかまへしるには、書物しよぶつヲよみ師しの教おしえニ随したがひ候そうろうよ

り出来でき候事そうろうことにて御座候。ソレモ出来でき又は書物しよぶつをよ

まず師ふずいの教おしえニ不随ふずいより生しやうじたる不肖ふしやう小人しやうじんニ御座

候。

詩を学ぶのも、文章を作るのも、教養人（君子）の行ない

でございませう。教養人とは、どのような人のことをいうのか、

知識人（小人）とはどのような人のことをいうのか、という

ことをわきまえたいことでございませう。

人が善くなるように、悪くならないようにと、いにしえの

聖人、賢人が、名言（この道理をうまく表現した言葉）を

残しておかれました。その道理と正義さえ、わきまえて知っ

ておれば、じゅうぶんではなくても、そのとおりにすること

でございませう。その道理と正義をわきまえて知るのには、書

物を読んで学び、先生の教えに従うことから身につけてくる

ものでございませう。

それもできないというのであれば、書物を読まず、先生の

教えにも従わない愚かな知識人でございませう。

君子くんしノ多おほくなる様ようニ、不肖ふしょう小人しょうじんのすくなくなる  
様ようにと申もう君上くんじょうノ御願望ごがんぼうより、大勢人おほぜいひとヲ集メあつ候そうろう  
て、トモズレニスリアゲミガキ上度あげたく、夫故学問所それゆえヲ  
御取立おとりたてテ被遊あそばされたる事ことニ御座候さそうらえ。左候得さそうらえば学問所  
ヲ預あずかり申役もうすやくは、重役じゅうやくも下役したやくも扱さておもしやくぶん職分しよくぶんニ  
御座候もうすどころと申もうす所ところヲ、心底しんていニ寸時すんじも忘ぼうレ申間敷もうすまじきは師し  
長ちやうのツトメニ御座候ちやう。  
忠臣ちゆうしんは出いテ不申共もうさずとも、不忠者ふちゆうものノ出でヌヤウニ、孝子こうしハ  
出ズトモ、不孝ふこうものでの出でぬやうニと心得こころえ候そうろうて、  
二年三年宛あてきようか教化たきことヲいたし度事たきことニ御座候たきこと。

教養人(君子)が多くなるようにし、愚かな知識人(小人)が少なくなるようにと殿様が願われることから、大勢の人を集めて、切磋琢磨(友人どうしで励まし合い競い合って向上すること)させるために、学校を建てられたのでございます。ですから、学校をあずかる役目の者は、重役でも下役人でも、重要な職務であることを、心の底から、いつも忘れないようにするのが、先生の務めでございます。真心を尽くす家来が出て来なくても、真心を尽くさない者が出て来ないようにし、孝行な子が出て来なくても、親不孝な子が出て来ないようにと理解して、二年、三年と教育したものでございます。

一 盛衰は物ノ常ニ御座候。盛ナレバトテ百年も  
せいすい もの つね ごぎそうろう きかん  
 二百年も一樣ニテハ立又こと古今歴然ニ御座候。  
いちよう たた ここんれきぜん  
 併シ取扱方にて十年が廿年、五十年が百年ま  
しか とりあつかいかた にじゅうねん  
 では持こたゆるものと相見申候。取扱あしければ  
もち あいみえ  
 火のもゆる様ニ候得共、ビツシヨリト水ヲカケタ  
よう そうらえども  
 ルやうニ相成候。君子不窮之業ヲハジメ  
あいなりそうろう くんし ふきゆうの なりわい  
 候時は、まづ衰へたる時は如何様に可相成、  
そうろうとき おとろ とき いかよう あいなるべく  
 但しびつしよりとはきえぬ様と申所ヲ、最初  
ただ とうすどころ  
 二考へ申度事ニ御座候。勝ても長追ひヲせず、  
かんが もうしたきこと かつ ながお  
 甲の緒ヲシメ候事、古より名人の所作ニ御座  
かぶと お いにしえ めいじん しょさ ごぎ  
 候。  
そうろう

一、盛んになることと衰えることは、いつもあることでござ  
 います。盛んだからといって、百年も二百年も同じように  
 成り立たないことも、むかしからいまにいたるまで明らか  
 なことでございます。でも、取り扱い方しだいで、十年が  
 二十年、五十年が百年まで持ちこたえるものです。その取  
 り扱いが悪いと、火が燃えるようであっても、びつしより  
 と水をかけたようになってしまふ。教養人が、きわまるこ  
 とのない事業を始めるときは、まず、衰えたときにはどの  
 ようになってしまふのか、びつしよりとぬれて消えてしま  
 わないことも、最初に考えておきたいものでございます。  
 勝っても長追いをせず、成功したからといって気をゆるめ  
 ず、さらに心を引き締めることが、むかしから名人の行な  
 いでござります。

くんじようごじんめい ありなされ そのごとつか しだい ゆきとど  
君上御仁明二被為在、其御徳化次第二行届キ、  
ごふうない こうていりきでん  
御封内の人民孝悌力田ノ民モ次第第二多く、扱御学  
かん しだい はんじようつかまつ しゆっせい  
館も次第第二繁昌 仕り、学問出精ノ人も多く相  
なること もうしあげるべきさま めでたきおんぎ ぞんじたてまつり  
成事、可申上様もなき目出度御儀二奉 存  
そろうろ しか あいかんが もうしそうらえ もはや  
候。併シツラツラ相考え申 候得ば、最早  
ただいま このうえ これなく ごじゆうぶんの おんぎ  
只今の御政治此上も無之、御十分之御儀と奉存  
なにとぞせ せしそん おうえまで これありたきこと  
候。何卒世々子孫の御上迄も、かく有之度事二奉  
存候。御学問所狭く相成候はば、人を分ち講日ヲ  
わか いかさまともひと おさま そろうろよう あそばされたくそろうろ  
分ち、如何様共人が納り候様二被遊度候。  
たくさん いっぱい  
沢山なる時も一杯、不足なる時も一杯二相成候  
よう つかまつりたくそろうろ  
様二仕度候。

君主の思いやりが明らかで、その徳に感化されてよくなる  
ことがしだいに行き渡り、国内の人々に、父母に孝行で、兄  
や年長者によくしたが、い、農業に励む者もだんだんと多くな  
り、学校教育も盛んになって、学問に精を出す人も多くなつ  
たことは、申しあげるまでもなくめでたいことと存じます。  
しかし、よくよく考えてみますのに、もう現状の政治で充分  
ではないかと存じます。どうか、子々孫々にまで、いまのま  
までありたいものと存じます。  
学校が手狭になったのなら、受講者を分けたり、講義日を  
分けたりして、どのようにも受講できるようにしてください  
い。大勢のときもいっぱい、少ないときもいっぱい利用で  
きるようにしたいものです。

へいほう　めいりんどう　ぞうりつつかまつりぞうろうせつ　ずいぶんでびろ  
敵邦にて明倫堂を造立　仕　候節、随分手広  
けいえいたしぞうらえども　はじめ　こう　ひら　ぞうろうひ  
く致経営候得共、初て講ヲ開キ候　日は、  
いっとうあきかみしも　まかりいでぞうろうにつけ　いっこうて  
一統麻上下にて罷出候付、一向手せまにて  
おさま　よんどころなくろうじゅう　さしず  
納りかね、無　扱老中の指図にて、堂の前後  
いたしなし　そんび　わか　きじん　どうじょう  
二敷物ヲ為致候て、尊卑を分チ、貴人は堂上、  
せんしゃ　どうか　いなら　もうしぞうろう  
賤者は堂下二居並び申　候　テ講ヲ終り申候。老  
きえつ　た　もうすべく  
臣執政喜悦ニたへず、急に又々堂ヲ作り足し可申  
ひょうぎ　そのときぐろうもうしだん　かたじけないこと  
評議二御座候。其時愚老申談じ候は、　忝　事  
ごぎ　ぞうらえども　しじゅう　かよう　これなきことひつじょう  
二御座候得共、始終ハケ様ニは無之事必定ニ  
ごぎ　ぞうらうあいだ　まずしばらくぞうさく　おや　くださるべく  
御座候　間、先　暫　増作は御止メ可被下候。

わたくしの国（尾張藩）で、藩校明倫堂を建設しましたと  
きに、たいへん幅広く運営し、最初の講義のときには、全員  
が麻上下で正装して出席しました。まったく手狭で入りきれ  
なかつたので、やむをえず老中の指示で、講堂の前後に敷物  
を敷いて、身分の高い者と低い者をわけて、身分の高い者を  
講堂の上に、身分の低い者を講堂の下に並ばせて、講義を終  
えました。老臣、執政ともに心から喜ばれまして、急に講堂  
を建て増しする評議になりましたのでごぎいます。そのとき、  
私が申しましたのは、「たいへんありがたいことではごぎい  
ますが、いつもこのようになるとは決まっておりますので、  
少しのあいだは、このまま、増築することはしないでくだ  
さい。

貴賤きせんの席せきを定さだメ、講日こうびを分わかチ、上分かみぶんは一月六度、  
中分なかぶんは四度、下分しもぶんは二度と相定あいさだメ申し度候もうたく、扱講さて  
日出席じしゅつは朝五ツ時あさごヲ以て定さだとし、五ツ時には学  
館がくの門かえを鎖とぎし、たとひ大臣有司だいじんゆうしにても門かえより歸り  
候そうろうよう様二被成可被下候なされく下さるべく。左候得さそうらえば七八百人千人  
位くらいは納り可申候おさま。行々衰ゆうすべくへ候ても、玄関しきの敷  
台だいへ子共こどもの集り、手まりをつかぬやうニ御定おさだメ  
被下度くだされたくと申達もうしたつし候得そうらえば、尤もつともなる事こととて相止あいや  
ミ申候もうし。仍これによつて之までいつ迄も堂いっばい二一杯これありは有きん之候。近  
年ねんとくがく督学ぞんりよも三代目、人々の存慮ぞんりよも有これあり之、信敬しんけいも薄うすく  
相成あいなり候得共そうらえども、規則きそくは私わたくしの立テ置候た 通おきにて、  
相応そうおう二人も出候いでて、学問所がくもんじょは依然いぜんと御座候うす。

身分の高い者と低い者の席を決めて、講義日をわけて、身分  
の高い者は、一月に六回、中ほどの者は四回、低い者は二回  
と定めてはどうでしょうか。そして講義は午前八時からとし、  
午前八時には門を閉めて、たとえ重役であっても遅刻したら  
歸らせるようにしてください。そうすれば、七、八百から千  
人ほどは受講できるでしょう。そして、将来、この学校が衰  
えてしまっても、子供が玄関の式台にあがっててまりなどを  
しないように定めてください、と申しあげたところ、もつと  
もなことだと増築しないことになりました。そのため、講堂  
はいつも受講者でいっぱいです。近年は校長も三代目になり、  
いろんな人の考えもあるし、信じ敬うことも少なくなってきた  
ましたが、規則は私が立てたときそのまま、ふさわしい校長  
も二人も出て、学校も以前のまま盛んでございます。

二度の<sup>せきさい</sup>せきさい 糝菜も<sup>きつと</sup>きつと 急度有之、<sup>かみ</sup>かみ 上の名代は<sup>みようだい</sup>みようだい 爵位の<sup>しやくい</sup>しやくい 老<sup>ろう</sup>ろう 臣大役にて<sup>あいつと</sup>あいつと 相勤メ<sup>もうし</sup>もうし 申候、先ヅケ<sup>かよう</sup>かよう 様なるもの二御座候。学館せまく候とて、<sup>まし</sup>まし 作り増作り増候ては、

限りも<sup>これなきこと</sup>これなきこと 無之事にて<sup>ござ</sup>ござ 可有御座候。

一<sup>ひとつ</sup>ひとつ 御学問所ヲ御立テ<sup>おた</sup>おた 被遊候<sup>あそばされ</sup>あそばされ 本意は、<sup>おくに</sup>おくに 御国の

人俗<sup>にんぞく</sup>にんぞく 質実ヲ<sup>うしな</sup>うしな 失ひ不申、<sup>もうさず</sup>もうさず 浮虚ニ<sup>ふきよ</sup>ふきよ ならぬやうニと

申所、<sup>かんよう</sup>かんよう 肝要ニ御座候。大夫は<sup>たいふ</sup>たいふ 大夫の道ヲ守り、

士は<sup>し</sup>し 士ノ職ヲ守り、<sup>じようげ</sup>じようげ 上下貴賤一同ニ<sup>わがくに</sup>わがくに 我國よりよ

き国は無之と<sup>これなき</sup>これなき 存候<sup>ぞんじ</sup>ぞんじ 様ニ<sup>いたしたく</sup>いたしたく 致度候。他所<sup>たしよ</sup>たしよ 他国へ

の吹聴<sup>ふいちよう</sup>ふいちよう は、<sup>ふらち</sup>ふらち 不埒の<sup>まつりごと</sup>まつりごと 政<sup>ふらち</sup>ふらち なく不埒の<sup>ざいみん</sup>ざいみん 罪民なき<sup>よう</sup>よう 様

ニと<sup>きこ</sup>きこ 聞え候<sup>そうら</sup>そうら はば、<sup>むじよう</sup>むじよう 無上の<sup>おんぎ</sup>おんぎ 御儀と<sup>ぞんじ</sup>ぞんじ 奉存候。

二度の孔子をはじめとする聖人を祭る糝菜も行なわれ、殿様の名代として老臣がその大役を務めました。まず、このようなことでございます。学校が狭いからといって、増築、増築をしていては、限りのないことでございます。

一、学校を建てた本来の目的は、国民の風俗が質素で誠実さを失わず、浮ついてまことがないようなことにならないようにすることが、とても大切なことでございます。

家老は家老としての道理を守り、士は士の職を守り、身分の高い者、低い者を問わず、すべての国民が、わが国よりのいい国はないと思うようにしたいものです。

他所他国へ言い広められることが、道理にはずれた政治ではなく、道理にはずれた罪人がいない、というようことであれば、なによりのことでございます。

いりよう

百石は百石の入用、千石は千石ノ入用、大きく申

せば国土は十萬石は十萬石、十五萬石は十五萬石、

そのうえ こと いたさぬこと

其上の事は不致事、扱ならぬ事ニ御座候。

ふきよ これなきよう

浮虚の無之様、実行の多き様ニと教へ立テ申度

そのところ しちよう おし かつ

候。其所は師長の教へ方、学生の学びかたニ

これあり

有之候。追々学生輩ノ詩文も出精故ニ、沢山

つたえみつかまつりそうろう せんじつぼう まい よろこびもうしそうろう

ニ伝見仕 候。先日某が参り悦 申 候

につき おしえかたよろしきゆえ

付、教方宜敷故ニかく迄詩人の出来の事、手

がらしごく だんしょうびつかわ もうしそうろう

柄至極の段称美遣し申 候。

百石は百石の必要な経費で暮らし、千石は千石の必要な経

費で暮らす。大きくいえば、国家は十萬石は十萬石で、十五

萬石は十五萬石で必要な経費をまかない、それ以上のことは

しないことです。してはならないのでございます。

浮ついて実のないことがないように、実行されることが多

くなるようにと教えたいものです。

そうしたことは、先生の教え方、学生の学び方にあります。

これから学生の詩や文章も、精を出して努めることでしよ

うから、それらをたくさん見ることにします。

先日、ある人物がやってきまして、喜んでおりましたので、

教え方がいいので、これほどまでに詩人が出てきたのであり、

その功績は当然のことであると、ほめたたえておきました。

そのごまい せうろう  
其後参り候て、詩文沢山ニ持参仕り、是を  
さかん  
ある盛なる学館へ遣し、夫々の評ヲモ請ひ  
つかわ  
のぞみもすべくもうしきかせせうろうにつき、しかるべく  
それぞれ ひよう  
可申望申聞候付、可然とは申候得共  
もうしせうらえども  
いか しかるべく ぞんぜずせうろうにつき またまたまい せうろう  
如何にも可然とも不存候付、又々参り候  
せつ ためもうしせうろう  
節は止申候て、先暫他へ遣し候事は見  
まずしばらくほか つかわ せうろうこと み  
あわせしかるべきおもむきもうしきかせせうらえ なるほど しょうちいたし  
合可然趣申聞候得ば、成程と致承知  
まかりかえ  
罷帰り候。  
りようこう ひと しめ あらたま もつ おほえもうし  
良工は人に示スニ璞ヲ以テセズト覚申候。  
しごくじょうず かんしん ほど ひろん おお もの  
至極上手感心ニたへぬ程ニテモ、非論は多き物  
二御座候。

その後、またやってきまして、詩や文章をたくさん持って  
きました。それで、これがある盛んに活動している藩校へ送  
って、それぞれの批評をお願いしようと考えているとのこと  
でした。よいように、とは言いましたが、ぜひに、とまでは  
思いませんでしたので、またやってきましたときには、やめ  
るように、と言いました。いましばらくは、ほかのところへ  
見せるようなことはひかえたほうがよいのではと、その思い  
を伝えましたところ、なるほどそのとおりです、と言って帰  
りました。良い職人は、掘り出したままの磨かれてない玉を  
出すようなことはしないと聞いています。とてもじょうずな  
ものだと感心するようなものでも、批判の多いものでござい  
ます。

いまだ作り習ひの詩文大邦君子へも示シ申度と  
つく なら しぶんたいほうくんし しめ もうしたき  
 申は、最早浮靡なる心より起り申候。此浮虚  
もうす もはやふび おこ もうしそろう このふきよ  
 の心情長ぜぬ様に致度候。  
しんじょうちよう よう いたしたくそろう  
 先ヅ内輪にて得と熟し候ての上と申心が実心  
ま うちわ とく じゆく うえ もうす じつしん  
 実情二御座候と、愚意二は存候より、右の通  
じつじよう ぐい ぞんじそろう みぎ とお  
 り二は申聞候。  
もうしきかせそろう

まだ、学んでいる途中の詩や文章を、大国の教養人（君子）  
 にも見ていただくこうというのは、まさに、浮ついた心持ち  
 から起ることです。こうした浮ついた心持ちが、大きくな  
 らないようにしたいものです。

まず内部でよく検討してから、という心持ちが、まこと  
 の心であり、実際のことだと、私は思いますので、そのよ  
 うに申し伝えたのです。

ひとつたいほうごせいじ たす もうす ひとびとじっこう ころぎ  
一 大邦御政事ノ助ケと申は、人々実行を志し、

虚飾ヲ恥ノ様ニ教へ申度候。報上の心は実行

より出テ、競進ノ心ハ虚飾より生じ申候。

人々分限ヲ弁へ今日を安ジ申候事、学問の

所得ニ御座候。

一、御国の政治の助けとなることは、人びとが実行すること

をころぎし、内実がなく上辺だけを飾りたてることをは

ずかしいことだ、と教えたことです。上かみにおくいる心

は、実行することから生まれ、張り合う心は、うわべを飾

ることから生れてくるのです。人びとが身のほどをわきま

えて、日々を安心して暮らすことが、学ぶことの成果なの

でございます。

御学問所頭取の人物は、君上の御眼力二有之事、  
大夫の取扱二有之事、三人にても五人にても、御  
入用程御挙用被遊候て相済可申、黜陟  
進退時宜に御随ひ被遊度候。唯々人々分限ヲ  
守り候様にと申処肝要ノ儀と奉存候。  
某生三年在塾、頭取ヲ為致置候処、実義篤心  
可看破事聊も無之候。始終調子の替ラ又生得  
二御座候。外々もケ様二御座候はば学政は先御  
間も合ヒ可申かと奉存候。

学校の責任者を誰にするかは、君主の見分ける能力、家老の取り扱いにあるのであり、三人でも五人でもそれにふさわしい人物を登用されればすむことなので、位を上げ下げして、それにふさわしい者を適当な時期に任命されることです。ただただ、人びとが身のほどを守ることが、最も大切なことだと存じます。ある生徒が、三年嚶鳴館に在塾し、塾頭をさせましたが、親切で誠実な心を持った者で、すこしも隠しごとをしませんでした。いつも、変わらない者でした。いろんなことが、このようであれば、教育行政を担当させても、まずは間に合うことと存じます。

人々温柔敦厚二相成、一同二相親愛相恭敬致

して、異論異風ノ起ラヌ様ニ心得可申事、師

長の極意ニ御座候と奉存候。以上。

初ニ申上候 通老衰にて何是くどくど

仕り、手筆はかなやらカタカナヤラ埒も

無御座候。扱々不敬の至極実以奉恐入

候。朝夕ヲハカリガタキ老衰の義、心程ニ

は申取りも相叶不申、さりとは慚愧なること

二御座候。其所は千万蒙御恩恕、一ツにて

も御取用二相成候事は、御汲量被遊

被下置候様ニ仕度奉存候。

人びとが、穏やかでやさしく、誠実で情にあつくなり、好意  
や親しみの感情をいだいて、慎みうやまうようにし、批判が  
出ないようにする心持ちが、先生の最も大事なことだと思  
います。以上。

はじめにも申しあげましたように、老いて衰えました  
ので、手紙は、しまりがなくなかなかカタカナが入り交じ  
ったものになりました。どうしたものか、礼儀にはずれ  
恐縮に存じます。朝なのか夜なのかわからないような老  
衰でございまして、考えたことを、きちんと伝えること  
ができません。それはそれは、自分の見苦しきや過ちを  
反省して、心に深く恥じいっております。そのところは、  
どうか思いやりとお許しをいただいて、ひとつでもお聞  
ききれいただければと存じます。

ふで したが そうらえ ほどもうしあげそうろう

筆二随ひ候得ば、いか程申上候ても尽つキ

ふもうきずそうらえ まずたいりやく ところ かきしる

不申候得ば、先大略の所ヲ書記し

ごらんにいれたてまつりそうろう

奉入御覧候。

たいふくんし とく ごひようぎ くだされたくねがいたてまつりそうろう

大夫君子へ篤卜御評議被下度奉願候。

いじよう

以上。

筆の運びにまかせて、どれほど申しあげても尽きること

がありません。おおまかなことを書き上げてお見せする次

第です。

家老らにおかれまして、よく評議していただきますよう、

お願いする次第でございます。以上。